

教員免許状更新講習

実験講座を担当して



附属駒場中・高等学校
仲里友一

選択B「ゲノム情報を活用する遺伝子実験の紹介」を、昨年度に引き続き開講した。現職教員対象の有料講習に、同じ身分の者が一人で丸一日の講師を務めるプレッシャーは、教育研究会の公開授業とは比べものにならない。初年度だった昨年は約半年間を準備に費やし、直前一週間は胃が痛むくらいのストレスを感じた。新しい実験手法を体験してもらうだけでなく、高等学校生物の授業コンテンツとの関連づけや生徒実験をする上での配慮、さらに新しい実験教材を自分で開発するためのノウハウをも伝えたいと欲張った。有り難いことに熱心に質問してくださる先生もいらっしや、私も教材開発の過程を記した実験ノートまで持ち出して応えた。



一介の現場教師が敢えて講座を開講する意義は、大学の研究者や専門家が用意する講座とは違った、現職教員のニーズに合ったものが提供できることにある。普段、様々な理由から教科の研修会等に自ら足を運べない方に、少しでも満足して頂けるものになるよう工夫を凝らしていきたい。



更新講習の会場校として



附属視覚特別支援学校
星 祐子

附属視覚特別支援学校を会場として、8月21日に選択講習B「現代教育の課題と展望」、22日に選択講習C「教養の新たな世界を体験する」のテーマの下、9講習を実施しました。

講習の1コマをご紹介します。「点字と手引きを学ぶ」の講習では、初めて点字に接した受講生の方々が6点の並びで50音を表記する規則性に納得し、「響きを聴きあうアンサンブル」では、リコーダーの音色を合わせることに真剣そのものの表情で取り組んでいました。



また、特別支援学校が連携しての講習「就学前の子どもたちと家族への支援」では、見えにくいこと、聞こえにくいこと、思うように手が操作できないことの疑似体験を通して、子どもたちの日頃の困難さを実感したり、「ものづくり・からだづくり」では、様々な素材と色の糸を使って手織りに挑戦し、Gボール(バランスボール)で思っきり体を動かし、受講者からは「日頃できないことに打ち込めて大満足した」との嬉しい感想が寄せられました。

これらの講習については、大学における学術研究と附属学校の実践を結びつけての講習、附属学校間の豊かな実践を融合しての講習など、附属学校があることを生かしての講習でしたが、受講生から大変好評だったことが何より嬉しいことでした。



この指とまれ

韓国交流からの“学び”“絆”

附属桐が丘特別支援学校高等部 3年 山ノ上 奏

2009年3月13日(高1)、私は学校代表として三育再活学校(サムヨック・リハビリテーションスクール)を訪問しました。肢体不自由という障害を持つ同じ境遇にある韓国の生徒達と交流し、直接語り合える喜びを感じました。その際、学年全員で発表する資料作成の準備に快く協力してくれました。国際交流を通じ、仲間のありがたさを学ぶことができました。そこから、今度は学年全員で訪問したいと思うようになりました。

高2になり、スカイプでの遠隔地交流授業(英語)を計3回(6月・10月・12月)行い、互いの文化や生活について話し合いました。最初は戸惑いもありましたが、回を重ねるごとに映像を通じ言葉が伝わることの喜びを感じ、



気持ちを伝えたいという意欲が沸きました。また、協力して取り組む中で、学年の一体感が生まれ、その結果、修学旅行先を韓国としました。

高3となり修学旅行の時をむかえました。韓国文化に関する講義や講師を招いての本場韓国のキムチ作り体験等の事前学習を経て、今年の7月7日、学年全員で三育を訪問しました。交流では、言語の異なる生徒同士が、直接コミュニケーションを取ることで繋がれるすばらしさ、身振り手振りでも相手に伝えたいという一生懸命な気持ちがあれば、分かりあい・理解しあえる喜びを味わいました。特に、体育で取り組んだ、障害者スポーツの日韓合同チーム対戦では、双方の生徒がチームとして一体感を得ました。

また、三育訪問を含む韓国滞在中は、韓国ならではのおもてなしを受け、韓国の歴史や文化を堪能することから、改めて自国の文化を見つめ直し、我が国のよさを実感する機会となりました。まさに「修学」旅行でした。

全員による韓国・三育の訪問が叶い、嬉しく思いました。また、この交流から、「障害はあっても何かをやり遂げようという気持ちを持つ大切さ」を体で学びました。肢体不自由校が海外へ旅に出る、異国の人と継続的に交流するのは大変難しく、珍しいと聞いています。支えてくださった多くの方々に、そしてともに協力しあった仲間へ、心から感謝します。

国際地理五輪での国際交流

附属駒場高等学校 3年 田口厚志

7月29日～8月4日の一週間にわたって行われた国際地理五輪台北大会に参加してきました。

地理五輪の特徴の一つとして、他の科学五輪と比べて規模が小さい大会であり、他国の選手と交流しやすいことが挙げられます。試験はすべて英語で行われ、また試験の中には他国の選手とともに行動するフィールドワークテストが含まれているため、英語でのコミュニケーションの機会が多かったです。また試験以外でも、文化交流のイベント(日本チームは弓道と羽根つきを紹介しました)やポスター発表会の時間が設けてあり、他国の文化や内情を知ることが出来ました。自由時間には部屋が近かったオランダの選手と観光に行くこともありました。

地理五輪は発祥の地がヨーロッパということもあり、ヨーロッパの国々、とりわけ東ヨーロッパからの参加が多いのも特徴です。日本にいと外国としてアメリカ、西ヨーロッパ、アジアを想像してしまいましたが、地理五輪を通して普段意識しない東ヨーロッパが身近に感じられるようになりました。ラトビアやハンガリーの人たちと話していく中で、自分とは異なる価値観を知ることが出来たのは、自分にとってとてもプラスだったと思

います。また、大会が終わってもフェイスブックをはじめとする交流ツールが存在するので今でも知り合った方と連絡を取り合うことができます。

地理五輪に参加して、地理に対する新たな興味が湧いたと同時に「世界」を感じる事が出来ました。地理五輪で得られた貴重な国際交流の経験を今後生かしていきたいと思っています。

